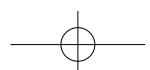
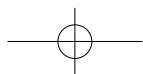


真宗保育カリキュラム

Shinshu Hoiku

公益社団法人 大谷保育協会





はじめに



2012年7月2日、大谷保育協会は公益社団法人として新たな出発をいたしました。

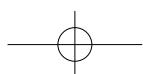
そして、私たちのこれからあるべき姿として、社会に資し、宗門に資し、会員に資する大谷保育協会を目指すことを宣言しました。

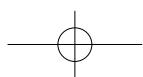
思いを巡らせば、1925年に全国の同志に呼びかけ、大谷派保育大会が開催されて始まった先人のご苦労は、1949年に大谷派保育協会の発足という形で身を結びました。それは現代社会の中で宗祖親鸞聖人の教えを尋ねる保育者はどのような生き方を選ぶべきなのかという“問い合わせ”を持つことを宣言した事に他なりません。

その“問い合わせ”は、やがて「真宗保育」という言葉を生み、その言葉をキーワードとして日常の保育実践を振り返ることが始まりました。

私たちの保育の場とは人と人との関わりの場です。子どもの育ちに悩み、自らのありように苦します。あるいは保護者との対応に悩み、時には保育者同士の関係に苦します。それらの悩みや苦しみが私たちを育てるのですが、悩みそのものが育てるのではなく、教えに照らされて光となり、生きるいのちの力となるのです。

このたびのカリキュラム発行によって、「本願に生き、ともに育ちあう保育」という真宗保育の理念がより一層具体化すると思われます。それは日々の保育と真宗の教えは、どのような関係にあるのかが、より明瞭になることです。





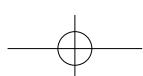
劣悪ともいえる子育て環境、あるいは困り感を持つ子どもたち。今日の時代社会は新たな困難を私たちに投げかけています。子どもたちと関わる中で、現に困難に直面し、苦悩しておられる方もいるでしょう。

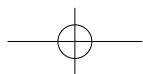
しかし、大谷保育協会の元理事長であった 藤 兼晃先生は、「苦悩することはデメリットじゃない、菩薩の遊びである」ことを私たちに伝えるのだと述べています（『子どもたちに育てられ 真宗保育の眼』）。

菩薩とは「さとり」、つまりいのちの真実を知ろうとする者たちです。私たちの苦悩は、いのちを深く知ることにつながっていることを教えてくれるのが真宗保育の眼なのです。

本書には少々難解な言葉もあるかもしれません。読み進むうちに、この部分はこのように言い替えた方が良かろうという想いが巡るかもしれません。そうした声が現場から上がり、さらに真宗保育の内容がいつそう深まる事を願って止みません。

公益社団法人大谷保育協会
理事長 脇淵 徹映





この本について

このカリキュラムを手にとってくださったみなさん、ありがとうございます。

真宗保育とは何なのか。

真宗保育はどのように保育の質を高めるのか。

私のしている保育と真宗保育はどう違うのか。

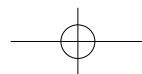
そんな疑問をもっていらっしゃる人が多いのではないでしょうか。

そのような思いにこたえるために、このカリキュラム冊子は誕生しました。

本書は、たんなる説明書におちいることなく、日頃の保育や教育の現場で活用できるものを目指しました。すでに園に勤務されている方には、自分の保育を見つめ直し、さらに発展させていける内容となっています。また、学生として保育を学ばれている方にとっては、自らの保育者像を描くうえでの指針となるでしょう。

真宗保育カリキュラム全体の構成としましては、真宗保育の理念や基礎知識にはじまり、行事のカリキュラム、真宗保育の視点、児童観、保護者支援、職員研修、環境、発達を含むさまざまな保育における諸課題について考究し、展開してまいります。本書を手元に置いていただき、保育を進めるうえでの参考として、あるいは保育を振り返る視点として、常に活用していただきたいと思っています。

今後、保育のさまざまな問題や課題に対応するため、章の追加、改訂を加えボリューム・内容ともに充実したものにしてまいります。



本書をお読みになり、その活動例をそのままおこなったとしても、真宗保育が出来ているということではありません。

内容をヒントに、真宗保育の視点をもって保育を工夫していただきながら、環境、時間、人等々、それぞれの保育に合わせて、それぞれの真宗保育を展開してください。

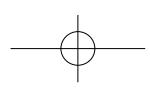
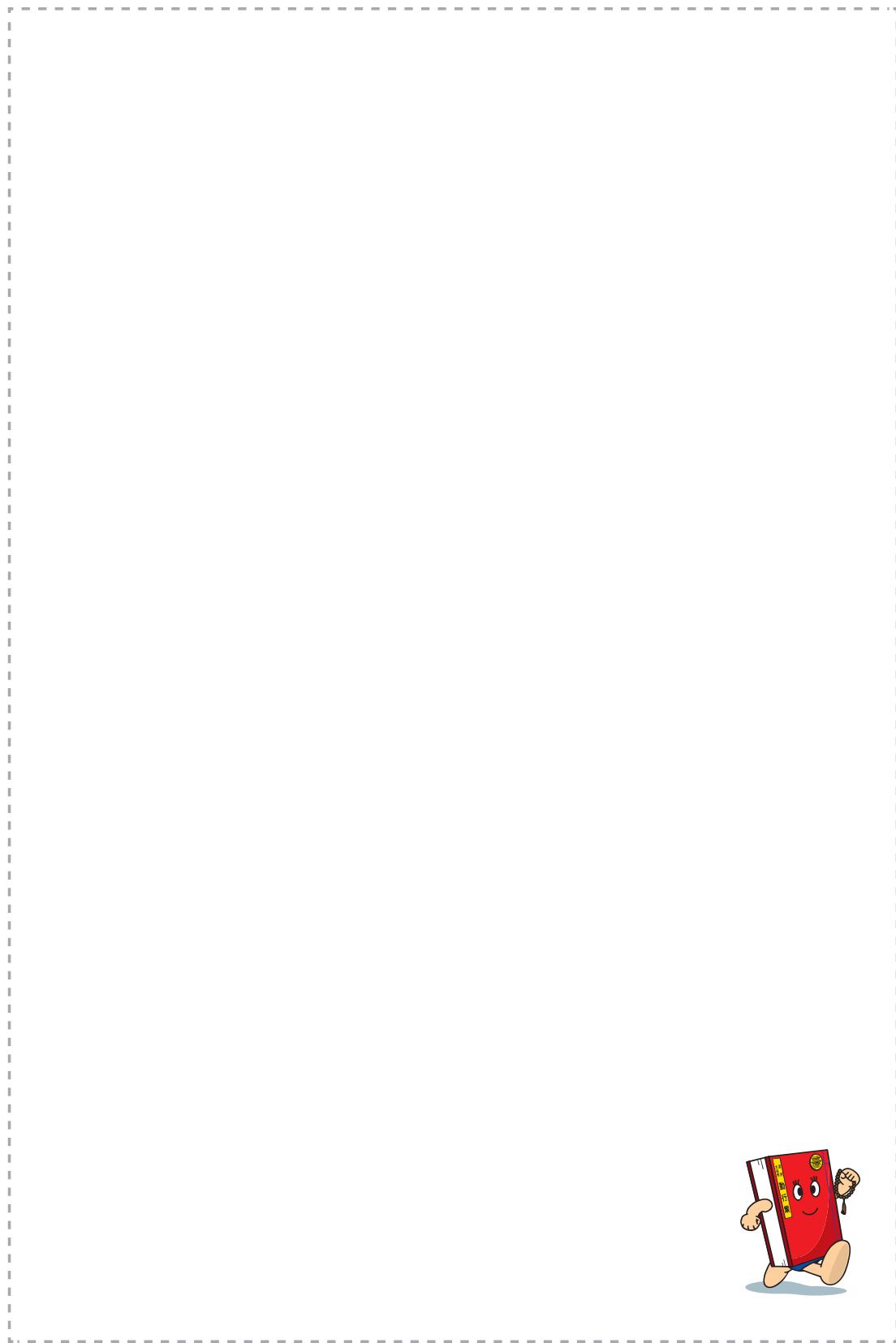
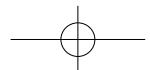
そして、この真宗保育カリキュラムは、たんに真宗保育の理解を深め、知識を増やすものではありません。子どもたちや保護者、職員間等々関わりのある人々を通して、自らの保育を問い合わせ続ける教材となるよう役立てていただきたいと思います。

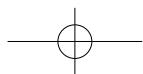
真宗保育が各園で実践されることで、保育の質が向上し、子ども・保育者・保護者が、自己の存在に喜びを感じあえるようになることを願い続けます。

この本の使い方

気づいたことや調べたいこと、また、意見交換や質問などのメモに活用してください。

各行事の最後には【行事の事前、事後とりくみシート】があります。記入後比較検証して、今後の保育実践や学びに役立ててください。





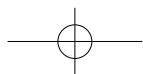
1 Shinshu Hoiku

真宗保育カリキュラム

CONTENTS

真宗	8
真宗保育	11
真宗保育の1から10	18
真宗保育の願いー「とともに」生きる	19





しんしゅう
真宗

● ● ● | 本当のことってなんでしょう。

このような体験はありませんか。

あなたは、何故か苦しんでいます。理由は、はっきりとは分かりません。それでも何とも言えない苦しみを感じているのです。

または、とても楽しいかもしれません。すべてがうまくいき、最高の幸せを感じていました。

それが、夢の中だとは気づかずに。

夢の中での苦しみ、喜びはもちろん幻です。でも、現実の世界のように感じることがあります。

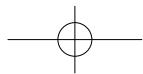
どれほど苦しくてもそれは夢。

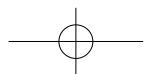
どれほど楽しくても、それもまた夢。

それでは、夢に気づくときは、いつでしょう。

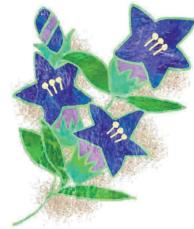
そう、目覚めたときです。目が覚めて、私たちはそれが夢だと気づきます。夢と気づいたときが目覚めた時とも言えるでしょう。その時、あなたはふっと我に返るはずです。

夢と気づいたあなたには、今、何が見えているでしょうか。





● ● ● | 歩き出すってなんでしょう。



どのような毎日を過ごしていますか。

生きることは旅に譬えられます。^{たと}道を歩いていくことです。あなたは、どのような道を歩いてきましたか。

自分なりではあっても、一生懸命に、まっすぐに歩いてきた方がほとんどでしょう。そのまっすぐな道が、少しだけ斜めを向いていたとは思わず。

始まりのわずかな開きは、終わりには巨大な誤差。歩くほど、あなたを異なる場所へと導きます。

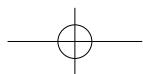
どれほど歩いても、それは迷路。

光なき道を、ただ闇雲に歩くなら。

それでは、どの道を歩けばいいのでしょうか。

そう、先に歩いた方をたずねるのです。その方がどのような生き方をしているのかを知るのです。その方はあなたを導き、歩むべき道を教えてくれるでしょう。それは古来からあった道でしょうが、やっと見つけた思いからすれば、眼前に道が現れたとも言えます。

その道はあなたに、どのような行き先を、与えるでしょうか。



● ● ● | 真宗ってなんでしょう。

私たちは、夢を現実と感じ、道を直進と思いつつ、日々を送っています。でも、そのような私たちだからこそ、真実を知り、進むべき道に出会うことが求められているのです。

けれども、自分たちの力でそれらに出会うことはできません。譬えれば、夜しか知らないなければ、朝日を求めるないようにです。私たちが、それでも真実の世界に生きることができるのは、そうあってほしいという、大きな願いに促されているからなのです。

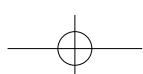
そのように、自分が見えていない私たちに、目を開かせ、真実の見方をあたえる大きなはたらき。それを阿弥陀仏の本願力といいます。そして、そのような、本当のことを説く教えを真宗というのです。

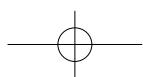
朝の光で夜が終わり、誰かの呼び声で目を覚ます。そして、今日も歩み出す。

目が覚めたあなたは、道が見たあなたです。

道が見たあなたは、真宗に出会ったあなたなのです。

- 「真宗」について知っていることや、イメージを書いてください。
- 今までに「そのような見方、考え方があるのか」、「自分は勘違いをしていた」と言えるような、「目が覚めた」体験があれば書いてください。
- 自分はこれまでどのような道を歩いてきましたか。また、これからどのような道を歩いて行きたいですか。





しんしゅう ほ いく 真宗保育

● ● ● | 真宗保育のイメージ

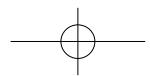


言うまでもなく、私たちが日々実践している保育は「真宗保育」です。子どもたちとお念仏を称えることも多いでしょう。しかし、「どのような保育を真宗保育と呼ぶのですか」と質問されると、答えにとまどいませんか。この当惑はどこからくるのでしょうか。

理由はいくつかあるかもしれません。けれども、その大きな要因は「何をして、何を目指すのが真宗保育なのか」ということが不明瞭な点にありそうです。それは「真宗保育」という言葉が持つイメージに関係しています。

真宗保育というのだから、浄土真宗という仏教の一宗派に関係があるに違いない。それは、真宗の教えを保育に取り入れることだろう。しかし、自分は仏教や、真宗の教えについて詳しいわけではないから、真宗保育は実践できないことになる。そうすると、自分が現に毎日行っている保育は何なのだろうか。そもそも真宗など知らなくても、きちんとした保育はできるのではないか？—このような疑問を持つ方も多いのではないでしょうか。

これは大切な問い合わせなので、少し考えてみましょう。

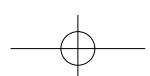


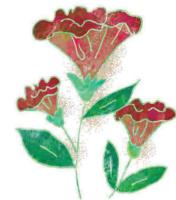
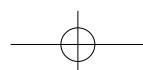
● ● ● | 浄土真宗＝浄土の真宗

真宗保育の真宗とは「浄土真宗」に由来しています。それでは浄土真宗、特に真宗とは何でしょうか。それは端的に言ってしまえば「真実の教え」「本当の教え」という意味です。ですから「浄土真宗」とは「浄土の真宗」であり、「浄土についての真実の教え」という意味になります。つまり「真宗」とは本来は教えの詳細な内容や体系＝教義を指すのではなく、その内容が真実であることを示していたのです。

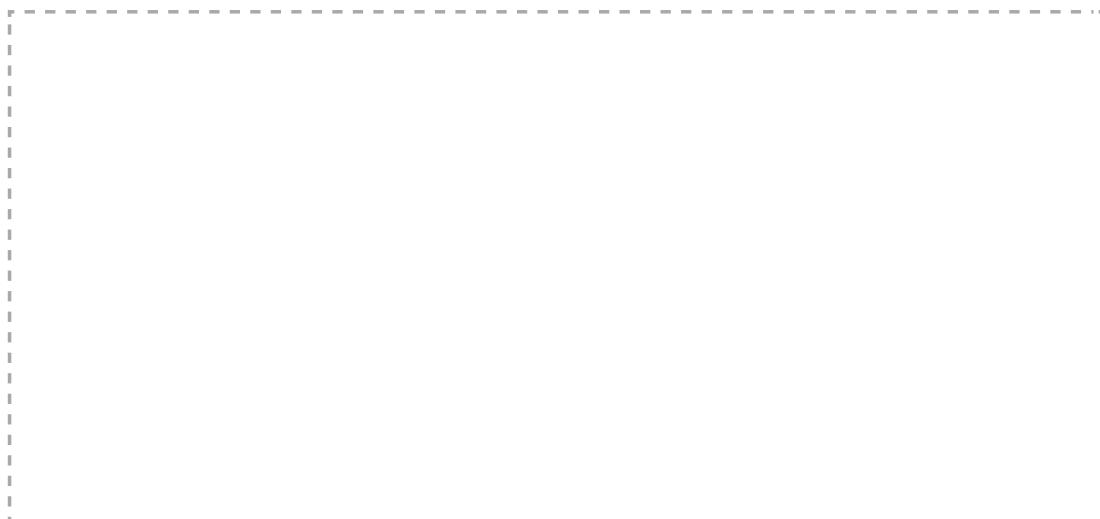
● ● ● | しばられた保育？

そのように真宗を理解することができるならば、ここで再度問わなければならぬことがあります。それは、私たちが、どのように真宗保育を理解しているのかということです。いえ、正確に言えば「どのように理解しているか」という意識的なものではなく、「どのように思いこんでいるか」という、いわば無意識





の問題かもしれません。私たちが、日々実践しようとしているにもかかわらず、真宗保育について答えを濁してしまうのは、真宗保育とは「真宗という教義にしばられた保育」という思い込みがあるからではないでしょうか。しかし、そのような思いは本来の真宗の意味から離れていることは明らかです。

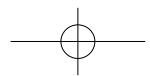


● ● ● | 真宗教義の保育

ここでもう一度、真宗保育の意味を問い合わせてみましょう。真宗保育が教義にのみ規定された保育ではないのであれば、どのように理解すればよいのでしょうか。

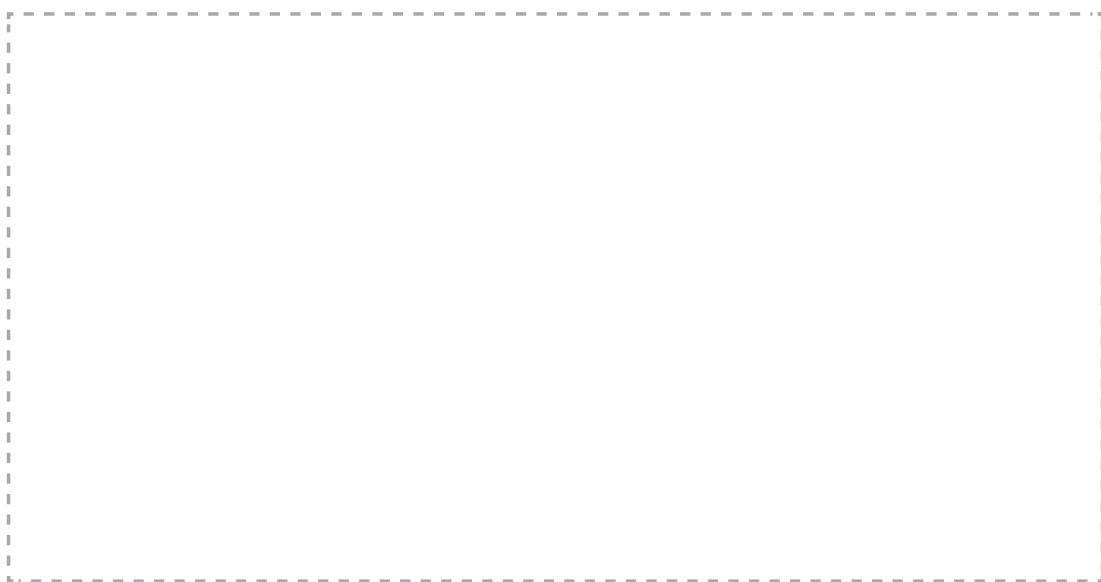
実は、私たちには真宗保育という言葉に対する理解の転換が必要なのです。

教義が先にあり、私たち保育に携わるものは、そこに従うものだという今までの思いを、ここでは「真宗教義の保育」と呼んでみましょう。それに対して私たちが目指したい保育は、どのように表現できるでしょうか。それは「真宗の保育」です。



● ● ● | 真宗の保育

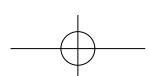
「真宗の保育」一繰り返すように、この場合の真宗とは教義の意味ではありません。「真宗」の本来の意味である「真実の」「本当の」という意味です。そのように理解することができれば「真宗保育」の意味も当然変わります。それは「真実の保育」「本当の保育」を求める営みです。子どもたちの成長に本当に必要なものは何かということを求めていく、いわば「保育の王道」なのです。真宗保育とはただ一つの正解があるのではなく、よりよき保育を目指す、常に過程にある営みなのです。

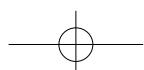


● ● ● | 教えと保育

もちろん教えが皆無であるわけではありません。真宗保育ですから、真宗の教えが核心にあることは確かなのです。

例えば、真宗保育の理念は、次のように示されています。

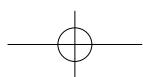




「本願に生き、ともに育ちあう保育」

ここで言われている「本願」とは浄土真宗において、最も重要な言葉であり、概念です。ですから、私たちは本願について学ばなければなりません。しかし、その学びの動機は、教義であるから学ぶのではありません。本願という言葉が、私たちの日常の保育において、欠かすことのできないもの、それなしでは保育が成り立たないものであるからこそ、学ぶのです。

教えを学ぶとは、自分たちを縛るために学ぶのではありません。かえって、そのような縛りから解き放たるために学ぶのです。教えとは、私たちが、子どもたちとともに、どのように日々を過ごせば、より命の充足を感じる人間になれるのかを聞き、考え、実践していくためにあるのです。

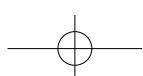


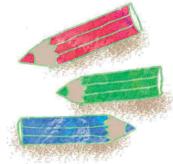
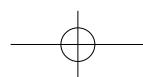
● ● ● | 自分を知る

教えを学ぶ大きな意味の一つは「自分を知る」ということです。私たちは自分のことを一番知っているのは自分だと思っています。しかし、それは本当でしょうか。私たちは自分の背中を見ることはできません。ましてや歩いているときに、足の裏を見ることはできません。しかし、背中や足の裏は自分ではない、と言う人はいないでしょう。さらに言えば、自分の顔でさえもそうです。自分の顔を知らない人はいません。でも、それは自分で自分の顔を見たのではありません。鏡や写真など、何かに写っている自分を見て、自分を知ったのです。

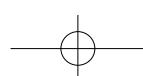
日々、保育に真剣にとりくんでいる私たちは子どもたちのことを第一に考えています。しかし、そこには真剣さ故に見落としてしまうものがあります。それは本当の自分の姿です。子どもたちのためと思ってやっていることが、実は自分の都合にすぎなかつたなど、私たちは矛盾を抱えながら保育を行うことがあります。でも、それは自分の顔が見えないように、なかなか気づけないのです。そのような自分を気づかってくれるのが教えです。教えを聞いて、自分を知るということは、個人的なことのように見えますが、そうではありません。保育とは何よりもあなた自身ができる活動であることを思い出しましょう。そうであるならば、自分の姿を知ることは、保育を行うあなたにとってはもちろん、あなたが関わる子どもたちにとっても不可欠な、最も大切なことなのです。

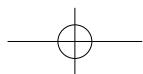
教えは鏡のようであると言われます。教えを聞くということは、見えない本当の自分を知ることなのです。ですから、教えを聞く=聞法が大切にされるのです。





- 真宗保育について、今までとはどのようなイメージを抱いていましたか。
また、現在はどのように思っていますか。
- 真宗保育への疑問があれば教えてください。
- あなたは、自分をどのような人だと考えていますか。
- あなたには、今と違う本当の自分がいると思いますか。それは、どのような自分ですか。





真宗保育の 1から10 (真宗保育数え歌)

先に真宗保育は過程であり、正解はないと述べました。しかし、指針が何もない出発さえできないかもしれません。ここで、試みに真宗保育の願われる毎日を述べてみましょう。

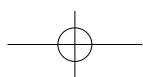
● ● ● | 真宗保育の1から10

- 1 一人ひとりが大切にされる毎日
- 2 二度とこない今を大切にする毎日
- 3 三宝（仏さま、教え、仲間）を何よりも大切にする毎日
- 4 知りたいという気持ちをのばしていける毎日
- 5 五感を刺激しつつ、喜怒哀楽の感情を豊かに過ごす毎日
- 6 六字の名前（南無阿弥陀仏）を称える毎日
- 7 悩み、迷いつつも成長できる毎日
- 8 早さにとらわれず、一人ひとりの成長を見つめる毎日
- 9 心と体を丈夫にできる毎日
- 10 友と共に大きくなっていく毎日

これらはもちろん一例ではあります。しかし、真宗保育が何を大切にするかを考える際に、一つの参考となるかもしれません。この数え歌の背景については、「真宗保育数え歌 解説」（25-29頁）をご覧ください。

- 数え歌で最も共感できたのは何番ですか。
- 自分が日々の保育で大切にしていることはありますか。
- 解説も併せて読んでみての感想を書いてください。





真宗保育の 願いー 「ともに」生きる

先に真宗保育の理念は「本願に生き、ともに育ちあう保育」であると述べました。つまり私たちの保育はこの言葉をもとに行われているのです。それでは、この理念にはどのような願いが込められているのでしょうか。

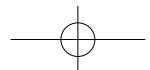
本願についてはこの冊子の別の箇所でもさまざまに述べられていますので、ここでは「あらゆるものを救いたいとする阿弥陀さまの願い」とだけ表現しておきましょう。私たちは誰もがそのような「願い」の中に生きていることを「本願に生き」と言うのです。それでは「ともに育ちあう保育」とはどのようなことを指すのでしょうか。ここで「ともに」を通じて、真宗保育について考えてみましょう。

● ● ● | 子どもと「共に」

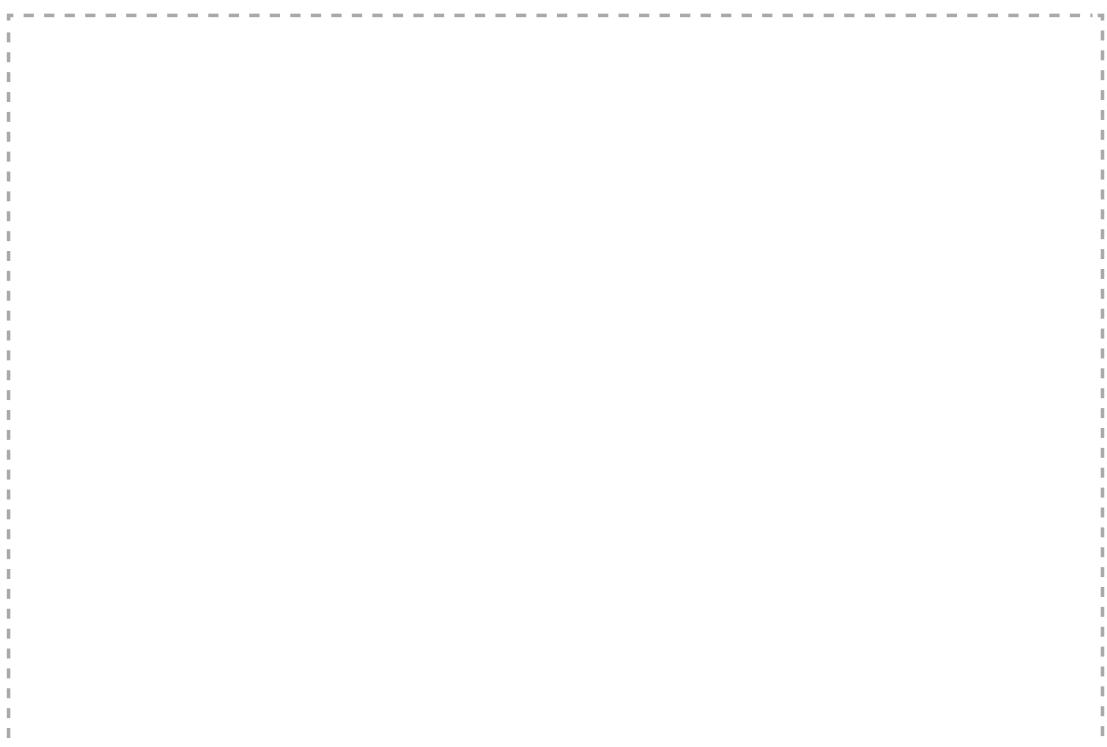
真宗保育では、子どもたちと共に大きくなることを大切にしています。これは、私たちが忘れてはいけない考え方であることは言うまでもありません。しかし、私たちは、どうしても「子どもたち」と「共に」というように「保育者と園児」＝「おとなと子ども」を分けて考えてしまします。それはもちろん間違いではありません。私たちが、子どもたちに教えるべきことは多々あるでしょう。

けれども、そこには一つの落とし穴があります。それは、真宗保育は子どもたちのものという思いです。より具体的に述べれば、真宗保育により身心が成長するのは子どもたちである、という認識です。しかし、本当にそうでしょうか。おとなたちは教えるだけ、伝えるだけなのでしょうか。

改めて、「真宗保育数え歌」を見てください。真宗保育の毎日を述べていますが、そこに主語はありません。つまり、子どもだけではなく、おとなにも該当するのです。何のためにでしょう。それは子どもと「共に」、私たち「おとな」も成長できるのが真宗保育だからです。よりよき生をおくることに、子どもやおとなと

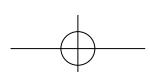


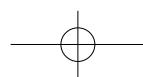
いう区別は関係ありません。より具体的に述べれば、子ども、保育者、保護者など園に関わるすべての人々が成長できるのが真宗保育なのです。真宗の用語を用いれば、本願という大きな願いは、すべての人にかけられているのです。



● ● ● | 仲間と「朋に」^{とも}

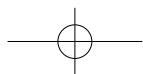
今まで述べてきたように真宗保育が理解されるとき、そこに子どもをどう見るかという、子ども観の転換が起こります。それは教えるべき対象としての子どもではなく、共に成長していく仲間としての子どもという認識です。同じ時代に生まれ、この園で出会うことができたという、仲間としての子どもたちです。そのような関係を「友」と呼んでもいいでしょう。





親鸞さまは、共に仏教の教えを学ぶ人たちのことを「同朋」と呼びました。「朋」も「とも」の意味ですが、この字は肩を並べるという意味が含まれています。上下の関係ではなく、横に並び、共に進んでいく朋としての関係が生まれるのが真宗保育なのです。

このような見方は職場の同僚にも該当します。私たちは生まれも育ちもそれぞれ違いますし、個性も異なるでしょう。それでも、真宗保育を実践するという他の園では見られない大きな共通項があるのです。仏教の教えを聞きながら、自分を振り返り、子どもたちと共に大きくなれる。数ある幼稚園・保育園から真宗保育の園で出会えたことは、数限りない縁が熟した結果なのであり、だからこそ職場の同僚は大切な仲間＝同朋なのです。不思議な縁があったからこそ会うことが出来たという意味で「園生活」は「縁生活」だと表現することも出来るでしょう。



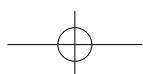
● ● ● | 仏と「ともに」

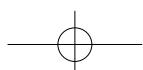
今まで述べてきたように、子どもたちと「共に」教えを聞き、「朋」として生きていくという思いが誕生する。これが真宗保育の願う「とも」です。けれども、忘れてはならないことがあります。それは、そのような大切な思いが生まれる背景には教えがあったことです。教えとは、言うまでもなく仏さまの言葉です。仏さまの言葉である教えがあつてこそ、私たちは日々の実践が成り立っていくのです。その意味で真宗保育とは「仏と共に」と言えます。教えが心身に聞こえてくるとき、私たちは仏さまと共にいるのです。

実は仏と「ともに」とは、もう一つの意味があります。それは私たちと仏さまは「友」のことです。お経では仏さまの言葉として「教えをよく聞いて忘れずに、そして教えを敬い喜べる人は、私の親友です」と説かれています（注1）。確かに、自分達の実感として仏さまを「友」だとは思えないかもしれません。しかし、重要な点は私たちの思いがどうであっても、仏さまからは「親友です」と語りかけられていることでしょう。仏さまと「友」であることを知るとき、そこには尊敬に満ちた親近感が湧いてくるのではないかでしょうか。

ですから真宗保育の大きな特徴は、仏さまと「共に」あり、仏さまと「友に」なることなのです。

（注1）親鸞さまが最も大切にされた『大無量寿經』に「法を聞いて、能く忘れず、見て敬い得て大きに慶べば、すなわち我が善き親友なり」とあります。（『真宗聖典』50-51頁）





● ● ● | 真宗保育とは

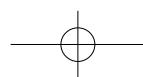
真宗保育によって、保育のすべてを語ることはできません。例えば、子どもの発達理解をはじめ、園生活における詳細については、書籍などをはじめ、他の意見を参照にしつつ行われることも当然あるでしょう。

それでは真宗保育は無意味なのでしょうか。

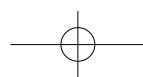
いいえ、そうではありません。真宗保育は地上に出る木々であると同時に、木々が生長し、立ち続けるために必要な根であり、地面なのです。自分の見方、子どもの見方、そして生き方を「教え」により振り返り、大切なことを気付かせてもらう—これが真宗保育によって誕生する「わたし」です。逆に言えば、教えによって、「わたし」が誕生することに真宗保育の大きな意味があるのです。それはたった一人の孤立した私ではありません。子ども、保育者、保護者などさまざま「わたし」が生まれます。そして、それぞれの「わたし」が「わたしたち」となり、「ともに」生きていくことを願いとするのが真宗保育なのです。

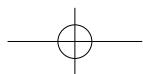
「真宗」とは「真実の教え」の意味であると先に述べました。真宗の「宗」は「むね」と読みます。それは「中心となる」という意味です。つまり真宗、そして真宗保育に出会うとは、真実の教えを自分の中心=むねとして生きていく人が誕生することを言うのです。そして、そのような人が誕生することへの願いを「本願に生き、ともに育ちあう保育」という理念はふくんでいます。

真宗保育の最大の魅力—それは子どもたちと時には見つめ合い、時には寄り添いつつ、「本当に大切な事って何だろうね」ということを教えと共に考えていけることなのです。



- 今の仕事につきたいと、思った理由は何ですか。エピソードなどあれば、具体的に教えてください。
- このような保育をやってみたいという、理想はありますか。
- あなたにとって「朋」は誰ですか。また、職場の同僚は、どのような存在ですか。
- 今までの保育の中で、「これを真宗保育っていうのかな」という体験はありますか。ぜひ、詳しく教えてください。
- 文章を読んでいて、改めて真宗保育について思うことを自由に書いてください。





真宗保育数え歌 解説

「真宗保育数え歌」は、そのまま読んでいただいても、保育の現場で大切にされるべき言葉、考えとなっています。しかし、そこには仏教の意味も込められているのです。以下に解説をしてみます。数字は『真宗聖典』(東本願寺出版部)の頁数を示しています。

1 一人ひとりが大切にされる毎日

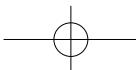
「ごこうしゆい 弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞しんらん一人いちにんがためなりけり。
されば、そくばくの業ごうをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(640頁)という言葉が『歎異抄』にあります。一人ひとりに寄り添うことの大切さを私たちも日々痛感していますよね。阿弥陀さまの本願もそうなのです。何よりも私自身にその願いは向けられているのです。

2 二度とこない今を大切にする毎日

私たちは、大切なことを先延ばしにしがちです。でも私たちに与えられている時間は「今」しかないです。仏教は「今」を大切にしてきました。例えば親鸞さまには「しかるに今、特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり」(356頁)という言葉があります。また最も古いお経の一つである『スッタニパータ』には「もう迷いの生は尽きた。もう迷うことはない」という趣旨の言葉が残されています。真実の教えに出会い、自分が変わっていくのは「今」であり、「今」与えられている、この人生なのです。

3 三宝さんぼう(仏さま、教え、仲間)を何よりも大切にする毎日

「何よりも大切なものは何ですか」と聞かれたら、どのように答えますか。家族、友だち、思い出、仕事、お金、愛など、人それぞれでしょう。でも、それらは一見バラバラに見えますが、実は関連があります。それは何故それらが大切なのかと言えば、自分が「よりよき人生をおくりたい」からこそなのです。もう少し、言葉を



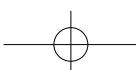
加えれば「いのち」を実感したいからとも表現できます。三宝とは正確には「^仏・^法・^僧」を指します。親鸞さまも尊敬していた聖徳太子は「^{あつ}篤く三宝を敬え」(963 頁)とおっしゃいました。私たちはこの3つによって、命を充実させ、よりよき生を送ることができるーだから佛教はこれらを何よりも大切な3つの宝=三宝と呼んだのです。

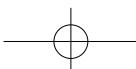
4 知りたいという気持ちをのばしていく毎日

「何で、どうして」と子どもたちは大人にたずねます。問い合わせが生まれることは、世界をもっと知りたいという気持ちの表れです。本当のことを知りたいという欲求が私たちには生来備わっているのでしょう。お経にはいろいろなないと答えが述べられています。佛教には、本当の生き方とは何だろうか、という問い合わせ根底にあるのですから、当然答えもそれに関連しています。ですから、「知る」ということは知識を増やすことばかりではありません。「生きる」「自分」「いのち」など、大切なことについて視点を与えられ、それに基づいて生きていくという、言わば「行動」も「知る」には含まれているのです。親鸞さまも「特に知りぬ」など、「知」を繰り返し用いています。

5 五感を刺激しつつ、喜怒哀楽の感情を豊かに過ごす毎日

子どもたちの表情はなんと生き生きしていることでしょう。大声で笑い、大声で泣く。踊るかのように喜び、肩を落として悲しむ。表現は違えども、そこにはその子の内面が表出しているのであり、自分に正直に生きているのでしょう。五感、感情、それらが消えないように伸ばしてあげたいです。親鸞さまも感情表現の豊かな方でした。例えば、お経の「^{かんぎゅやく}歡喜踊躍」という言葉を一字ずつ解説しています(539頁)。それらは文字通り「喜び」と「踊り」ですから、本当に嬉しいことについて述べているのです。その他にも悲しみ、怒りなど、さまざまに述べています。ここで見過ごせないのは、親鸞さまが感情について述べるときには、その根底に佛教との出会い





いがあることです。人生の先生に会えたことを心から喜び、仏教をおとしめることを心から怒る。自分のありのままの姿に悲しみ、そのような自分でも生きていけるという教えを喜ぶ。親鸞さまには常に、真実の教えに出会えたことへの感動が流れていたのです。

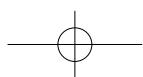
6 六字の名前（南無阿弥陀仏）を称える毎日

子どもたちには、それぞれに素敵な名前が付けられています。名前が素敵なのは、一人一人の名前には、一つ一つ大切な願いが込められているからです。

「南無阿弥陀仏」のことを「六字名号」と言います。これは阿弥陀さまを六字で表現したものです。その他にも「南無不可思議光如来」の「九字名号」、そして「帰命尽十方無碍光如来」の「十字名号」があります。名号とは名前のことですが、これら3つはバラバラなのではなく、一つの願いをそれぞれに表現しているのです。それは「人々に光を与えていたい」という願いです。ここで言う「光」とは何でしょうか。仏教では、私たちが自分の本当の姿に気づかないまま日々を過ごしていることを「迷い」と教えます。「迷子」を考えれば分かるように、それは暗闇を歩いているようなものです。そのような私たちに、進むべき道、帰るべき道を照らし出すのが「光」であり、阿弥陀さまなのです。つまり阿弥陀さまの名前には「進むべき生き方を照らし出したい」という願い、意味が込められているのです。そのような願いによってできた名前を称えることを、お念仏といいます。

7 悩み、迷いつつも成長できる毎日

「悩みがないのが悩み」と冗談っぽく言う人がいます。その方が本当にそうなのかはともかく、悩みはないにこしたことはありません。でも、私たちはさまざまなことに悩みます。仏教では「煩惱」と言いますが、不安、妬み、欲望、いろいろな感情が私たちをとらえ、離すことはありません。そのような自分をどのように考えればいいのでしょうか。親鸞さまは、そのような私たちは「凡夫」と呼ばれる存在であり、



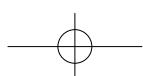
「それが私たち人間の正直な姿なのです」と教えます。「凡夫というは、無明煩惱 われらがみにみちみちて、よく欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころ おおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず」(545 頁) と述べています。大切なことは、そのような私たちを「悲しい」とする仏教の視点です。そしてさらに大切なのは、そのような私たちだからこそ、仏教に会ってほしいと願われていることなのです。悩みとは、自分を見つめ直す、大切なきっかけなのでしょう。

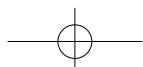
8 早さにとらわれず、一人ひとりの成長を見つめる毎日

「早く早く」は育児に禁句、分かっているけど、でもついつい・・・。そのように悩む人も多いでしょう。「早く起きなさい」「早く食べなさい」「早く着替えなさい」「早く寝なさい」と、朝から晩までせかしつぱなし。何故、私たちは待てないのでしょう。それは時間が、いや正確に言えば自分の時間が勿体ないです。でも、子どもには子どもの時間の流れがあり、その子なりの成長の度合いがあるのです。時間と成長がかみ合う時に出来るようになるのでしょう。「いつか出来ればいいや」という、ゆっくりとした目も持てれば、子どもも私たちも少しは楽になれますね。仏教には「時機」という考えがあります。「時」は時間や時代を指し、「機」は人間の性質の意味です。「時機 純熟の真教」(155 頁) という言葉があります。親鸞さまが最も大切にされた『大無量寿經』というお経を指しています。『大無量寿經』は時代にも、私たちの資質にも、最もふさわしい真実の教えであるという意味です。子どもの実際の成長を無視した発達観があり得ないように、真実の教えとは、ただそこにあるだけでは意味がありません。私たちに伝わるからこそ、真実の教えと言えるのです。

9 心と体を丈夫にできる毎日

「元気な子どもに育ってほしい」「強い心と体になってほしい」と、私たちの誰もがそう願います。でも「強い心と体」って何でしょう？仏教には面白い表現があり





ます。親鸞さまは本当の信心を「真実信」と言いました。その真実信を「金剛心」であるとしました(235頁)。「金剛」と言われても分かりませんが、「ダイヤモンド」のことです。つまり本当の信心とは「ダイヤモンドのように、堅く、こわれないもの」という側面があるのです。ところが、その信心を得た者の生き方も力チコチに固まるのかと言えば、それが全く逆なのです。仏さまの教えを本当に信じた人は「身心柔軟」であると述べられています(245頁)。自分の信=芯がしっかりすれば、柔らかさを保ちながらも、中心はぶれないということなのでしょう。

10 友と共に大きなっていく毎日

「友だち」に会いたい—これが園生活が楽しい理由の一つです。でも、実際は友だちとの関係はいいことばかりではありません。けんかもすれば、泣かされることもある。それでも友だちといるのは楽しい。私たちは友と共に園で大きくなっていくのです。

仏教ではどのように友だち、あるいは仲間を考えるのでしょうか。親鸞さまには多くの門弟たちがおいででしたが、自分を先生とは呼びませんでした。『歎異抄』には「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」という言葉が残されています(628頁)。親鸞さまにとって、周りにいた方々は弟子ではなく、共に教えを聞いていく尊敬すべき仲間だったのです。親鸞さまはそのような方々を「同朋」と呼ばされました。

そのように仏教で「友だち」「仲間」と言えば、ただの仲良しという意味ではなく、共に教えを聞いて、本当のことを求めていく関係を指すのです。その意味においては、保育者、園児も友だち=同朋なのです。



